



80年前の 綴り方集～ 「草原」



篠原高三さん



草原

このほど稗古場の篠原充さんより、昭和16年12月8日に戦死した父・篠原高三さんが遺された資料を寄贈していただきました。

篠原高三さんは明治37年3月25日有田町に生まれ、生前二里や山代の尋常高等小学校を経て、外尾尋常高等小学校（現有田中部小学校）の教師を勤めていました。学校勤務の傍ら、歌人としても短歌結社「ひのくに」の社友として活躍しました。

出征した中国大陸の戦地から日本に送った歌は歌人伍長の「戦線からの歌便り」として、新聞紙上にも紹介されるほどでした。そのひとつを紹介します。

天幕の間より見ゆる秋空をすがしむときも
弾はゆきをり

寄贈資料の中に、外尾尋常高等小学校の教師時代に作られた「草原」という、子供たちの綴り方をまとめた作品集がありました。冊子は2種類あり、ひとつは縦22.6cm、横17cmで、表紙などには子供たちが描いたと思われる絵が掲載されています。最初のページには「歩く路をはっきり知る。これが人間の使命と思われれます。」という言葉から始まる篠原先生から子供たちへのメッセージが綴られています。発行は昭和3年3月16日。

内容は尋常高等小学校1年生の子供たちが書いた童話、日記、短歌などです。今の中学1年生にあたる年齢ですが、当時の子供の暮らしぶり、考え方などがわかる貴重な資料でもあるとともに、子供たちが綴った文章を添削し、印刷した篠原先生の熱意も伝わってきます。

梶原秀雄さんの日記には次のようにありました。（いずれも原文のまま）

「11月30日 金曜 晴 内では窯前で忙しかったので帰るとすぐ家の手伝いをした」

「12月1日 土曜 曇り 午後より雨 内へ帰ると車力を丸尾にかえてこいといわれたので、弟と二人で車力をかえしに行った。六時頃内に帰って夕食をすまずと夜業の手伝い

をした」

川口種次さんの日記。

「12月1日 土曜 曇後雨 湯に私が行く時、父はもう入って来ていた。そして合った時私が兄の下駄を持って来ていなかったため『これを持って行け』と自分にはだして冷たい雨降りに行かれた時に私は、親の愛する心の厚きを感じた。夜は麦蒔き加勢の人で夕食の時、父は火鉢の端で好きな酒を呑みながら、おかげで蒔く事ができたと、お礼の言葉をいっていた」

もうひとつの表紙には「草原 第二号」とあり、縦17cm、横11.6cmと前号より小さくなっています。発行は昭和6年1月22日で、「尋常6年集 綴り方細目に現れたる叙情的表現の一助として」とあります。

こちらは子供たちの短歌が中心ですが、いくつか紹介します。

（正司クサさん）

ちらちらと神社の前の梅の木に綿をまくよに
雪降りつもる

（浦川ハツネさん）

山も野も茶色に枯れた冬近く向こうの畑に
人が麦まく

（藤川フジエさん）

お正月楽しかりけり門松が軒にずらりと
ならんで居りぬ

（山田フサエさん）

ほのぼのと明けゆく朝の静けさを破るは家の
雨戸なりけり

印刷所はいずれも有田駅前通りのアララギ社とあります。篠原先生は子供たちの豊かな感受性を育てる目的で印刷費用も負担されたようです。文集の後記には「沢山綴り方を清書してもらったけれ共、金が高くかかるので、随分皆の綴り方を見切って捨てた」ことを詫びています。

季刊

皿山

2006

春

No.69

有田町歴史民俗資料館・館報

松浦党と有田氏

～有田・西有田の夜明け～

2006年3月1日、いよいよ新しい有田町の歴史が始まります。二つの町が一つになり、これから共に歩みを進めるにあたってお互いを理解するには、今までに培われた歴史を知ることひとつの方法ではないでしょうか。

有田川の西岸を南北に連なる国見山ろくには、石器製作の重要な素材の一つである上質の黒曜石を産する腰岳に近接する地理的な好条件から、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が点在しています。

その中のひとつに坂の下遺跡がありますが、この遺跡から出土したアラカシの実が発芽し「縄文アラカシの実」として広く知られるようになりました。昨年7月、西有田町郷土史研究会が中心となり、「縄文アラカシの実」を使って焼酎やプリン、豆腐などの特産品を作れないかと試食会を開いたというニュースも記憶に新しいと思います。

このように悠久の歴史が流れる西松浦地域ですが、今回は窯業中心の有田町と、農業中心の西有田町の現在をさかのぼって、有田焼以前の有田地方の歴史を紹介します。

松浦党のおこり

今から1000年ほど前、京都の貴族たちは、はなやかな生活をして、政治に力を入れなくなりました。その結果、地方の政治は乱れ、武力を以って地方を治める集団・武士団が出てきました。松浦地方でも平安時代の終わりのころから「松浦党」という武士団が現れました。松浦党は源氏の流れをくみ、11世紀ごろより海上活動を得意とする武士団として知られていました。源氏と平氏の壇ノ浦の戦いでは、平氏方として戦いに参加した水軍の中に松浦党の名前を見ることができません。「松浦党」という名称は、こうした武力を持つ集団に対して、京都の貴族などがつけた呼び名です。

松浦党の発展

松浦党のはじまりは、延久元年(1069)、肥前国松浦郡今福(現松浦市)に、都から来た源久という人物からといわれています。しかし、それ以前にも、松浦地方には源姓で一字の名を持つ人がいたようです。寛仁3年(1019)に刀伊(朝鮮語で夷狄の意。高麗人の称呼をそのまま襲用したもの。今の中国黒龍江省方面を占拠した女真人)が筑前・壱岐・対馬などに押し寄せるといふ大事件が起きました。突然の侵入に各地の武士たちは懸命に戦いました。その中に以前、肥前介という役職についていた源知という人がいました。この源知が、松浦地方の武士をひきいてこれを撃退したことが藤原実資の日記「小右記」に出てきます。この人物こそ松浦党の先祖ではないかと考えられています。

源久の子供には、直・持・聞などの人物がいました。直の子供には、清・披・圃・栄・遊などがいます。この人たちも源姓で一字名を名乗っていました。さらに住んでいた場所の地名を名前につけて名乗るようになります。清は今福松浦氏・志佐氏(松浦市)の祖、披は平戸松浦氏(平戸市)・伊万里氏(伊万里市)の祖、圃は山代氏・楠久氏(伊万里市)の祖、遊は大河野氏(伊万里市)の祖、そして栄が有田氏(西有田町)の祖となります。



南北朝時代の松浦党

城の出現と分布

皆さんは城という言葉からどのようなイメージをもちますか。城といえば、天空に高くそびえる豪華な天



守閤を持ち、石垣がめぐる城を連想されるのではないのでしょうか。

しかし、松浦党が活躍した時代の城は、高い山の頂上や尾根など、自然の地形を利用した所に築かれています。現在は山の中に土塁や空堀跡などが残っていますが、地上にあった建物は全く残っていません。

伊万里市内には源直が東山代町川内野の山寺に大きな館を構え、山代町久原には飯盛城、南波多には聞が築いた荒久田城、遊は大川町川西に日在城、直の孫の上は伊万里町に伊万里城を築き、この西有田地方には有田氏が唐船城を築きましたが、築城の年代は諸説あって定かではありません。



唐船城の遠景

松浦党の終焉

松浦党は、戦国時代の終わりごろになると、平戸の松浦氏が現在の北松浦郡・松浦市の範囲を支配するようになり、現在の伊万里市や西松浦郡の地域は佐賀を本拠とする龍造寺氏の支配下に入っていました。

文禄2年(1593)、豊臣秀吉が波多三河守親を滅ぼし、波多氏が滅亡したことによって松浦党の時代が終わり、伊万里地方の山城の多くもなくなったといわれています。そして時代は中世から近世へと移っていきます。

《参考文献》

- ・「西有田町史 上巻」西有田町史編さん委員会
- ・「ふるさと読本海と交流 わたしたちのふるさと」
伊万里・北松地域広域市町村圏組合

皿山越横街道を歩きました

2月12日(日)、「柄崎・唐津街道を歩く会」が主催されて、有田皿山から武雄までの旧道である「皿山越横街道」を歩く会が催され、当館からも参加しました。県内はもとより福岡や長崎などから45名の参加者があり、年齢も小学校2年生から70代までと幅広く、18キロを6時間かけて歩きました。

午前10時、駅前を出発。本町にある武雄道・伊万里道追分を確認してから内山地区を歩きました。この道は文化10年(1813)9月、伊能忠敬測量隊の一行が歩いています。その記録は次の通りです。

「同二十二日晴天、六ツ時後岩谷川内村出立。(中略)岩谷川内川、渡十五間。同十間、枝中野原分、左禅宗永昌庵、岩谷川内川中十間、枝稗古場、枝赤絵町、右に十六善神社、同法花宗法元寺、右に禅宗桂雲寺、枝本幸平分、枝白川分、右一町斗引込八幡宮、枝大樽分、枝上幸平分、左一向宗西光寺、小休笹屋政五郎、小川中五間、枝泉山分、左弁天社」と克明に記録を取りながら、山内の立野川内から三間坂を通り、鳥海村から西谷峠へと進んでいます。

西谷峠は現在の国道35号線とは大きく異なり、北側の山の中に小さな道が続いていました。途中は猪の足跡が残るほどの険しい道でしたが、伊能測量隊も小休止した熊十の茶屋跡周辺と思われる地域には、陶片などが点在していました。

江戸時代からこの道を通して佐賀本藩から皿山代官所の侍たちが有田へ来たり、佐賀へ出かける皿山の人々が歩いたのだと思います。

また、江越礼太の私塾で学んでいた長崎・千々石の橘常葉(当時22歳)は、明治9年白川から武雄へ湯治に行っていますが、武雄・脇本陣(現在の東洋館)まで3時間半で着いています。昔の人が眺め、歩いた道をたどりながら、改めて皿山の歴史の一端に思いを馳せた一日でした。



こんなこと、 ありました

町屋で昔話を聞く会

冬休み初日の平成17年12月23日(金)、小雨降る寒い中、今年度初の企画として「町屋で昔話を聞く会」を行いました。昭和5年に建てられた本幸平・鷹巣瑞光堂(旧松政商店)の20畳もある座敷をお借りし、昔ながらの火鉢で暖をとりながらお話ボランティア「ひこうせん」のメンバーに昔話を語っていただきました。八尋典子さんらによる巧みな有田弁での黒髪山大蛇退治、十二支の話、こぶとり爺さんの話などに、子供たちは寒さを忘れて聞き入っていました。

その後、火鉢で餅を焼いて食べましたが、炭火でふくらむ餅を前にして、子供たちは食べるより焼くことに夢中のような様子でした。



オンリーワン事業の来館者

昨年からは県内の小中学校を対象としたオンリーワン事業が始まり、佐賀県のオンリーワンとして有田焼を取り上げた学校から有田町への訪問が相次いでいます。当館には今年度小・中学校15校、総数1138人の来館者がありました。

多くは資料館内の展示品と、隣接する泉山の石場を見学するコースです。400年の歴史を1時間弱で話すのは困難を極めますが、将来県外や国外に羽ばたいていくであろう子供たちに、ふるさとの宝、誇りを心に抱いてほしいと願いながら案内しました。

町制50周年記念写真展

1月4日から31日まで、有田町制50周年を記念して、有田町企画情報課との共催で、中原の原榮三郎さんと武雄市の一ノ瀬泰造さんが昭和30年～40年代にかけて撮影された写真の展示を行いました。

期間中、昭和34年と36年に岩波映画社が撮影した有田町の映像を流しましたが、12代柿右衛門さんや12代今右衛門さんの肉声が入った映像に、来館者も興味深く見入っていました。



お知らせ

3月1日の両町合併に伴い、それぞれの歴史民俗資料館は「有田町歴史民俗資料館東館(旧有田町)」、「有田町歴史民俗資料館西館(旧西有田町)」となります。電話番号は旧来通りです。

また、2月28日を以って久富桃太郎館長が退任されました。

お礼

平成11年より7年間館長を勤めさしてもらい、勉強をさせてもらいました。無事に退任することが出来、皆様に厚くお礼申し上げます。(久富)

季刊『皿山』

通巻69号(平成18年3月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185